



泊村公民館図書室

泊(とまり)村といえば、原子力発電所(以下泊原発)を思い浮かべるでしょう。では原発が作られる前はどのような村だったのでしょうか？

泊村は札幌、小樽方面から見て積丹半島の反対側に位置します。高速バス「いわない号」で終点の岩内まで札幌から約 2 時間半。岩内からバスを乗り換えて泊村公民館へ行くことができます。岩内の港から遠く泊原発を見ることはできますが、泊村からは国道トンネルの横にある原発を見ることはできません。

でも泊原発を見学することはできます。以前泊村を訪問しており、原発を見学しました。事前の申し込みなどが必要です。トンネルの手前に原子力 PR センター「とまりん館」があります。こちらは自由に見学できます。

原発を見学する時はこちらの博物館に行き、手荷物を全てロッカーに入れて係員のクルマで現地に向かう仕組みです。運転免許証など顔の入っている身分証明の提示が必要となり、もし忘れてしまうと見学できません。

何度も検問があり、ようやく到着。施設内の景色の良い大きな窓ガラスから見る原発はすぐ目の前。それほど大きな建物とは感じませんでした。スマホなど持参不可なので撮影は一切できません。泊には3つの原発があり、2009 年運転開始した3号機は国内で一番新しいそうです。係員の方が国の審査が厳しく何度も施設の見直しと書類審査を繰り返していると語っていました。国内で大きな自然災害が起きるたびに見直しを行っているようです。

私は原発に賛成反対は述べません。知る必要はあると思い見学に行きました。

泊村公民館図書室は原発から5キロほど。トンネルを抜けて少し進んだところにあります。岩内からバスであちこち迂回して 30 分ほど。クルマなら 15 分で到着します。

それほど古さを感じない公民館の一角に図書室が入っています。公民館の受付の方が図書の出しも行なっています。室内はそれほど広くなく、書架は壁面が中心。その壁面の郷土資料を手にとると、原発が建てられる前の素朴な港や、炭鉱時代の様子を資料から知ることができ、原発ができる前の村の景色と異なることに驚きます。

入室すると新着と寄贈図書が面だしされていました。部屋の中央には閲覧テーブルとちょっとしたミニ展示を実施。特徴的なのは、書架案内プレートが通常の図書館のように、本と本の間には挟むような形式ではなく、POP 用紙を棚に貼り付けて、棚の正面から本を見つけやすいようにしています。公民館図書室ではこのように壁面を書架にする作りをよく見かけます。

さて、泊村とは一体どのような自治体でしょう？人口は 1400 人ほど。「北海道のエネルギーのふるさと」と『北海道の図書館員が薦めるブックガイド』で「茅沼炭鉱史」（泊村発行）について書いています。原発に勤務する職員は岩内など泊村周辺に散らばっているようです。1号機が発動したのは 1989 年。原発以前の産業はニシンを中心とした漁業と炭鉱でした。この地域の炭鉱の歴史は古く、発見は安政の時代にまでさかのぼり、開村は 1880（明治 13）年です。茅沼（かやぬま）炭鉱として昭和の時代まで栄えましたが、全国の炭鉱同様に終焉します。泊の山中に行くとクマがとても多く、村や原発の職員が山中へ入る場合、かなり緊張するらしく、閉山後に一変してしまったのがわかります。

積丹半島は 1996 年の全面開通まで半島全てを網羅していなかったため、先端の神威岬を経由して泊村へ行くことができませんでした。つまり原発開始より後となります。

札幌や小樽から向かうと、旅行者はほとんど神威岬から先には行きません。泊村方面への交通量はとても閑散としています。2024 年神威岬方面から中央バス神恵内線（岩内―泊―神恵内―神威岬）が廃止となり、現在は岩内から神恵内まで自治体運営バスが運行しています。

2024 年 7 月訪問

加藤 重男